

〈論 文〉

アイヌ語静内方言の後置副詞

奥 田 統 己

目次 はじめに

- 1 資料および分析方法
 - 2 先行研究
 - 3 後置副詞の統語論上の特徴
 - 4 個々の後置副詞の記述
- 参考文献

キーワード：アイヌ語、後置副詞、格表示、格助詞、副助詞

はじめに

本誌1号(1995)に掲載した拙稿「アイヌ語静内方言の接続助詞」および3号(1997)に掲載した「アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞」に引続き、本稿ではアイヌ語静内方言の後置副詞、すなわち副詞として自立語的に用いられるほか文中のさまざまな要素に後続して格助詞的または副助詞的に働く一群の語の意味・機能について考察する。

同じ方言についてはすでにREFSING(1986)が総合的な記述を行っており、本稿はその記述に対して修正・補足を試みたものである。また本稿が対象とする領域についてはすでに知里真志保(北海道・樺太全般)田村すず子(主に沙流方言)浅井亨(石狩方言)らを中心とした研究者による分析が示されている。

以下では静内方言の後置副詞について、まず統語論的特徴に関する先行研究を概観し、ついで筆者による統語論的特徴の分析を示し、そのうえで個々の語について、先行する分析を随時参照しながら、記述する。

モニターとして本稿を読み、貴重なご意見をくださった先生がたにこの場を借りてお礼を申し上げる。

1 資料および分析方法

拙稿(1995、1997)と同様、本稿が資料とするのは北海道日高地方中部の静内町に在住した織田ステノさんが語った口頭文芸を中心とする延べ約11万語のテキストである。これらのテキストはいずれも、静内町教育委員会があるいは同委員会の委託を受けた筆者が採録したもので、筆者が録音からの文字化を行った。その大半は静内町教育委員会(編)(1991—1995)として対訳のうえ公刊されている。

本稿にまとめた分析を筆者が本格的に始めたのは話者が死亡したあとである。そのため本稿での記述は基本的にテキスト中の用例から導かれる支配的な用法の指摘にとどまっている。そこで記述の信頼性についての情報を補うためそれぞれに用例の概数を付記した。

本稿の資料は英雄叙事詩などの口頭文芸を中心としており、会話的な資料をほとんど含んでいない。したがって本稿の分析は、日常会話での用法というよりは口頭文芸に特徴的な用法を反映したものである。なおREFSING(1986、p.65)によれば、同書の記述は口語資料と口頭文芸との双方に基づいているとされる。

また拙稿(1995)で述べたとおり、織田さんのアイヌ語は、現在得られる資料から推測される静内川上流の他の話者の方言に比べて、いくつかの点でより北海道東部的な特徴を持っている。そのため静内地方全体のアイヌ語を把握するためには、織田さんの言葉とその他の話者の言葉とを突き合わせて行く作業が今後必要である。

2 先行研究

「はじめに」で述べたとおり、本稿が取り扱うのは、副詞として自立語的にも働くいっぽう、文中のさまざまな要素に後続して助詞的にも働く一群の語である。アイヌ語にこうした性格を持つ語が存在することは、従来の研究者によってもすでに指摘されている。

金田一(1931、pp.49—50)は助詞についての記述の冒頭部分で次のようなただし書きを行っている。

但しアイヌの助辞は、多くは句頭へも置き得るところの、独立の意味を今尚持つもので、畢竟それらは、副詞が助辞的に用ゐられるものに外ならない。

これに対して知里(1953:16—19)は助詞の「独立的用法」について次のように述べている。

助詞はそれだけでは纏まった意味を表わすことができず、従って単独で文節を構成することもできないのであって、一般に他の概念語に付属してそれと共に文節を構成するのである。然るに往々にして助詞が単独で文節を作る場合がある。(中略)

直接立場(或は文脈)に付属して文節を構成しているのである。(中略)

結局、アイヌ語の助詞全体の数から見る時は、この種の独立的用法をもつものは過半数に達していないのであって、それをもたない助詞の数も相当に多く存在すると見なければならぬのである。(中略)

副詞として句頭に立つのは、助詞の独立的用法の一部に過ぎず、(中略)この他に、第三種の助詞(奥田注:田村(1988)の接続助詞)が独立すれば接続詞として機能し、第一種の助詞(奥田注:田村(1988)の助動詞)は文として機能する。(中略)現在の共時意識から云うならば、寧ろ助詞が副詞的に用いられるに過ぎないはずである。何となれば、それらは単独で取り出しても「で」とか「ほど」とかいう極めて漠然とした抽象的な観念しか与えず、従って単独で文節を構成する能力は無いのであるが、立場(或は文脈)を与えられたときに始めて「それホド」「それデ」などの如き纏まった意味をもち、単独でも文節を構成し得るに至るからである。

また助詞の下位分類それぞれについて、知里(1942)は「独立的用法」の有無を下のように記述している。

- 第一種の助詞(奥田注:田村(1988)の助動詞)「独立的用法を有するものがある」
- 第二種の助詞(終助詞)「独立的用法を持つものは無い」
- 第三種の助詞(接続助詞)「多く独立的用法を有し、接続詞にも転用される」
- 第四種の助詞(格助詞)「大部分独立的(副詞的)用法を有する。」
- 第五種の助詞(副助詞)「独立的(副詞的)用法を有するものもある。」
- 第六種の助詞(係助詞)「独立的(副詞的)に用ひられることは無い」
- 第七種の助詞(間投助詞)「独立的(副詞的)に用ひられることは無い」

浅井(1969, p. 786—787)も、助詞のなかには「自立語とも認められることのあるような形式」もあるとしたうえで、本稿が取り上げている諸形式を助詞に含めて記述している。

これらに対して田村(1960: 345)は

従来“助詞”と言われていたものには、いろいろな異質のものが混じっている。単独で文を成すことのできるものもあれば、殆んど接辞に近い程独立性の弱いものもある。そこで私は品詞分類をやり直し、非常に独立性の弱い単語のみを一括して「助詞」と呼ぶことにする。いわゆる“助詞”の中でも、独立性の強いものは、動詞、名詞、副詞、接続詞などの項目で取扱われるであろう。

としたうえで、知里(1953)を参照しながら次のように述べている。

従来アイヌ語の助詞の多くは“独立的用法”を持つと言われていたが私は“独立的用法”を持たないものだけしか助詞と呼ばない。

ここで知里(1942)が示したさまざまな「独立的用法」と対照して田村(1960)の記述を解釈すれば、助動詞的に働くものは主に動詞、接続助詞的に働くものは接続詞、格助詞として働くものは後置副詞、副助詞として働くものは副詞に、それぞれ分類することになる。

そして田村(1964: 40—41)はすでに「後置副詞」という用語を明示的に用いている。そこでは「名詞的形式の職能」の一つとして「後置副詞に後続されてこれと統合する」ことがあげられ、次の例が示されている。

hapo neno 《おかあさんに似て》

また田村(1982, pp. 88—89)は、位置名詞に目的格の人称接辞が接頭することに関連して「目的格人称接辞をとる後置副詞の存在」に言及し、次のほかturaとtomotuyeの例を示している。

en-os ek
私の後から 来た

田村(1988, pp. 37—41)は「副詞」のなかに「後置副詞」という下位カテゴリーを立て、包括的な記述を行っている。そこではまず

名詞句の後ろにおかれて、これと統合して連用語をつくるものもある。これを後置副詞と呼ぶ。この中には、人称接辞をとるものもある。

と後置副詞を定義する。そしてさらに「i)主格の人称接辞をとるもの」「ii)目的格人称接辞をとるもの」「iii)人称接辞をとらず、前側の名詞が目的格とも解せないもの」「iv)動詞句や文と結びつく」「v)位置名詞と位置を示す格助詞とは、しばしば結合して、一つの後置副詞と同様の機能をもつ」などの類をあげている。

いっぽう田村(1988, p. 41)は助詞のセクションの冒頭で次のように述べる。

多くの場合、助詞と平行した機能を持ちながら、ときには前の語句との統合関係なしに、独立の文の文頭にも現われる語もある。

独立性の比較的強い助詞と、独立性の弱い自立語(動詞、名詞、副詞、接続詞)の間には、明確な境界はない。この2分類は便宜的なものである。

そして副助詞の項(p. 51)でpatekについて「独立的用法があるので、これは「助詞」ではなく「副詞」の中に入るが、多くの点で前後の結合のしかたが副助詞と共通である。」と述べ、またtakupについて「独立的用法もあり、また、副詞と結合しない点でも「副助詞」とは違うが、他方、「副助詞」と似た点もある。「名詞」「名助詞」「副助詞」「接尾辞」の中間的存在といえよう。」としている。

ただし田村(1996, p. 516)はpatekという見出し語に後置副詞という品詞を与えている。この項目のなかのpatekの用例はいずれも直前の形式の統語論的機能を変えていないので、この品詞分類と田村(1988)の後置副詞の定義との関係はさらに整理しなければならない。

また田村(1988, p. 47ff.)は「格助詞(後置助詞)」という項を立てて次のように述べている。

後置詞(名詞句に後置され、次の語句との関係を示す語)の大部分は、G「副詞」の中の2「後置副詞」のところで扱ったが、中に特に独立性の弱い、文頭、接頭には現れないものが数語ある。いずれも、人称接辞はつかない。「後置助詞」とでもよぶべきものであるが、便宜上、「格助詞」とよぶ。

REFSING (1986) はclitics (付属語) のなかでcase postpositions (格後置詞) およびrestrictive postpositions (限定後置詞: 拙稿 (1997) の副助詞) として本稿が対象としている形式の一部について記述している。またpatekを、自立語のAdverbs of Place (場所の副詞) および付属語のrestrictive postpositionの2つの箇所を示している。ただし例文は後者のほうでしかあげていない。また一部をREFSING (1986, pp. 124-125) は位置名詞に含めて記述している。しかし以下に「格助詞的に働く後置副詞」としたものが名詞句に後続して副詞句を形成するのに対し、名詞句に位置名詞が後続したかたちは一般に名詞句なので、この記述は適切でない。

3 後置副詞の統語論上の特徴

3.1. 本稿では後置副詞を次の条件を満たすものとして定義する。すなわち、直前の要素と結びつくことなく自立語的に副詞として働くほか、文中のさまざまな要素に後続して助詞的に働く語である。

この定義と上に概観した先行研究とを対照すると、次の2点が問題になる。

まず第1点は、知里 (1942, 1953) 浅井 (1969) のように「助詞の独立的 (自立語的) 用法」とするのではなく品詞を分けて記述するかどうかである。この点について本稿では、品詞分類の際の大きな区分として自立語と付属語とをまず立てるという、田村 (1960) らの記述が含意している立場をとる。とくに本稿の資料の中心となっている韻文では、自立語と付属語の区別が韻律論的な規則のなかで重要な役割を果たしていると考えられる。ただし知里 (1942) らの立場に立つことによる記述上の決定的な困難は認められない。

第2点は、田村 (1988, p. 37) のように「名詞句の後におかれて、これと統合して連用語をつくる」もの、つまり格助詞的に働きうるものだけに後置副詞を限定するかどうかである。本稿の定義は、田村 (1988) と異なり、「助詞的に働きうる自立語」あるいは知里 (1942) らのいう「独立的用法を持つ助詞」のうち、自立語としての用法が副詞的であるもの全体を含む。そして後置副詞のなかに、統語論的機能を基準として「格助詞的に働く後置副詞」「副助詞的に働く後置副詞」という2つの下位分類を設定する。

3.2. 本稿で取り上げる後置副詞の大半は「格助詞的に働く後置副詞」の下位分類に属する。その統語論的機能としては次の点が認められる。

ア 文中で独立の副詞として用いられ、場面または文脈中のある要素とその文との関係を表す。

イ 名詞句に後続して副詞句を形成し、直前の名詞句の文中における格関係を表示する。

ウ 目的格の人称接辞が接頭したかたちで独立の副詞として用いられ、人称接辞の指す要素の格関係を表示する。なおアイの場合にも3人称の人称接辞が接頭していると考えれば、アの用法はウに統合することができる。

エ 終助詞を伴わない文に後続して副詞句を形成し、接続助詞と同様に働く。この用例のなかには、

直前の文がいったん終止し、後置副詞が新たな文の文頭で独立的に用いられていると考えることのできるものもある。しかしいっぽうで、音声的にそうした終止感の認められない用例も多い。

本稿では、上のアの用法での「場面または文脈中のある要素」イの「直前の名詞句」、ウの「人称接辞の指す要素」エでの「直前の文」を後置副詞の「先行要素」と呼ぶ。

実際の資料中では、ア～エの機能すべてを確認することのできない後置副詞が多い。その理由としては、用例の数が十分でなくまたすべての機能の有無を話者にあたっていないことをあげなければならぬ。しかし語によっては、意味論的な制約などから本来すべての用法を持っていない可能性もある。その意味では上の4つの機能は格助詞的に働く後置副詞の原型の特徴だとすべきである。なお、これら4つの機能のあいだには含意関係は認められなかった。

このグループの後置副詞に、動詞の接頭辞で項を1つ減らす働きを持つもののうちの*i-*《もの・ひと》または*u-*《お互い》が接頭し、全体で名詞句に後続しない副詞を形成することがある。

3.3. 「副助詞的に働く後置副詞」として本資料中に認められるのは *keray* と *opitta* の2語である。その統語論的機能としては次のものをあげることができる。

ア 文中で独立の副詞として用いられ、場面または文脈中のある要素を、その文との関係を変えることなく、取り立てる。

イ 名詞句か、副詞句かまたは動詞の目的語的要素となる動詞句かのいずれかに後続し、直前の要素の文中での働きを変えずに取り立てる。

ウ *opitta* には人称接辞の *eci* が接頭し、「あなたたち皆」という意味の独立した副詞となる。「格助詞的に働く後置副詞」が持つウエの用法は「副助詞的に働く後置副詞」には認められない。

3.4. 名詞句に後続して副詞句を作る語には、以下で記述したほかにも、場所の名詞句としか結びつかない *ta* 「～で、～に」 *un* 「～へ、～に」 *wa* 「～から」 *peka* 「～を(通って)」、さらに普通名詞と結びつくことのできる *ekopas* 「～にもたれて」 *epitta* 「～の一面じゅう」 *epeka* 「～のために」 *ekari* 「～のまわりを」 *okari* 「～のまわりを」 *tomotuye* 「～を横切って」などを本稿の資料中に見いだすことができる。しかしこれらの用例はいずれも名詞句に直接後続した自立性のないものばかりであった。3.1. の定義によればこれらは助詞として記述されることになる。

なお本稿の立場を他方言についての従来の記述に適用すると、「接続詞としても接続助詞としても働く」とされてきた一群の語は「接続助詞的に働く後置副詞」という下位分類に属することが予想される。しかしすでに拙稿(1995:142—143)で述べたとおり、本稿の資料中には「自立語的に接続詞として働く語」が認められず、文に後続して副詞的形式を形成する語は自立性の弱い「接続助詞」か、あるいは「格助詞的に働く後置副詞」のうちエの用法を持つものであると考えることができる。また知里(1942)らの指摘している「独立的用法を持つ助動詞」の例も本稿の資料中には認められない。

4 個々の後置副詞の記述

4.1. 格助詞的に働く後置副詞

4.1.1. から4.1.5. までは、主に空間的な関係を表すものである。いずれも3.2. に述べたウの接続助詞的に働く用法を持たない。

4.1.1. *esor*、*esoro* 「～に沿って下へ」

先行要素が山などの場合は頂上からふもとへ、川や沢、あるいは村の場合は川の上流から下流のほうへ向かって、述語動詞の動作が行われることを表す。*esor*と*esoro*の意味の違いは認められない。資料中の用例数は約40である。REFSING (1986, p. 124) は位置名詞としている。

- (1) *kamuy nupuri esoro rap=an*
 神 山 に沿って下へ (私が)降りる
 「神の山の頂上からふもとのほうへ私が降りた」

(1)(2)を含む用例のほとんどは3.2. のイの用法のものである。しかし(2)では*esoro*一語で韻文の一行を形成していることから、自立性を持っているのだと判断できる。

- (2) *kamuy unpirma / suwat katkemat/esoro / kem soratki*
 神 知らせる 炉かぎ 奥様 に沿って下へ 血 したたる
 「(兄の死を) 神様が知らせて下さり、炉かぎの女神に沿って下へ血がしたたっている」

4.1.2. *kari* 「～を通して」

道、窓、土手の上など、通り道になっている先行要素を通して、述語動詞の動作が行われることを表す。用例数は約50である。(3)が格助詞的な例、(4)が独立的な例である。REFSING (1986, p. 124) は位置名詞とする。

- (3) *heperay hepas toska kari payeka*
 川上へ 川下へ 土手 を通って (悪者たちが) 行き来する
 「川上のほうへ川下のほうへ土手の上を通して悪者たちが行き来した」

- (4) *ear kani ruyka … cikir askepet an=epekare somo ki yakanak*
 細い 金属の 橋 足 指 (私が)通す (否定) する したら

esirpici=an kotomne. kari ikia p arhoketu,
(私が)足を踏み外す そうだ (そこ)を通過して その もの ひた走る
「針金の橋…足の指をかけなかったら
足を踏み外しそうだ。そこをとおってそいつ(悪い姉)はひた走った」

4.1.3. okannatki 「～のまわりを一周して」

先行要素のまわりを一周しながら、述語動詞の動作が行われることを表す。約15の用例がみられる。(5)が格助詞的な例であり、(6)では人称接辞を伴って独立的に用いられている。REFSING(1986)には記述がない。

(5) cise okannatki munrise=an
家 のまわりを一周して (私が)草むしりする
「家のまわりを一周して私は草むしりした」

(6) i=okannatki kiraeomanan
(私)のまわりを一周して 逃げて歩く
「私のまわりを一周して(拾ってきた娘が)逃げて歩いた」

4.1.4. pekano 「～に正対して」

先行要素の正面で、述語動詞の動作が行われることを表す。用例は5例得られている。これらの例はいずれも名詞句に後続して助詞的に働いているものだが、接尾辞のnoを取ったpekaに動詞接頭辞のuが接頭したかたちであるupeka《向かい合って》という副詞が存在することから、このpekanoは本来自立性を持っていると推定する。この働きのpekaについてREFSING(1986)は記述していない。

(7) iwan rametok sintoko pekano rok wa oka
6人の 勇者 シントコ に正対して 座る して いる
「6人の勇者がシントコ(儀式に用いる宝器の一種)に正対して座っていた」

4.1.5. turasi 「～に沿って上へ」

先行要素が山などの場合はふもとから頂上へ、川や沢、あるいは村の場合は川の下流から上流のほうへ向かって、述語動詞の動作が行われることを表す。用例は80強存在する。(8)が格助詞的な例、(9)が独立的な用例である。REFSING(1986, p. 125)は位置名詞としている。

(8) kotan turasi paye=an

村 に沿って上へ (私が) 行く

「村の中を川の上流のほうへ私が行った」

(9) paye=an ayne kamuy nupuri an. turasi paye=an.

(私が) 行く あげくに 神 山 ある (そこ) に沿って上へ (私が) 行く

「私が行ったあげくに神の山があった。その山のふもとから頂上のほうへ私は行った」

4.1.6. eirpak 「～と同時に」

この項から4.1.9.までは、時間的な関係を主に表すものである。いずれも3. に述べた接続助詞的な用法を持っている。

eirpakは、先行要素の動作と同時に述語動詞の動作が行われることを表す。本稿の資料中にはeirpakが名詞句に後続して格助詞的に用いられている確実な用例はみられない。しかし格助詞的に働く後置副詞の原型的な用法のうちア(10)ウ(11)エ(12)を持っていることから、この下位分類に含めて記述する。用例数は10ほどである。REFSING (1986) は記述していない。

(10) a=kor sapo cise or ta ahun koonno eirpak ahup=an

(私が) 持つ 姉 家 所 に 入ると (そのこと) と同時に (私が) 入る

「私の姉さんが家に入ると同時に私は家に入った」

(11) poro su ari suke=an hine "kamuy utar i=eirpak poronno…"

大きな 鍋 で (私が) 炊事する して 「神 たち (私) と同時に たくさん

「大きな鍋で私は炊事して『神々よ、私といっしょにたくさん… (食べてください)』」

(12) tane cup ahun eirpak wakkata=an kusu pet or ta sap=an

今や 太陽 入ると同時に (私が) 水汲みする ために 川 所 に (私が) 降りる

「今や日が沈むと同時に私は水汲みをしに川岸に降りた」

4.1.7. ekari, ekarinenay 「～とちょうど同時に」

先行要素の動作と同時に述語動詞の動作が行われることを表す。eirpakに比べて、同時性がわざわざ意図されたものであるか逆に予測できないものであることを強調するニュアンスを持っている。やはり格助詞的な用例の確実なものは存在しないが、格助詞的に働く後置副詞の原型的な用法のうちア(13)ウ(14)エ(15)の例が存在する。ekariの用例数は10例強、ekarinenayの用例は1例である。REFSING (1986, p. 129) はここでのエの働きの例をあげたうえで接続詞としている。

- (13) payeka=an konno
 (私が) 歩き回ると
 ekari nep ne ya kicitce hawe an=nu.
 (そのこと) とちょうど同時に 何 だ か キイキイいう 声 (私が) 聞く
 「私が歩き回るとちょうど同時に何かキイキイいう声を私は聞いた」

- (14) hehewpa=an konno i=ekari hehewpa
 (私が) 覗く と (私) とちょうど同時に 覗く
 「私が覗くとちょうど同時に(向こう側の人も)私を覗いた」

- (15) ukosukup pe tanepo uhotanukar ekarinenay
 許婚者だ もの 初めて 訪問し合う とちょうど同時に
 i=resu sapo i=apkaste ruwe enta an ya
 (私を) 育てる 姉 (私を) 歩かせる こと いったい ある か
 「許婚者であるものが初めて逢い引きするちょうどそのとき育ての姉は私を(いたずらに)訪問させたのか」

4.1.8. opokin 「～のすぐあとから」

先行要素の直後に述語動詞の動作が起こることを表す。3.2.に示した後置副詞の用法のうちウ(16)ア(17)エの用法があわせて7例得られている。REFSING (1986)には記述がない。

- (16) i=opokin rura
 (私) のすぐあとから 運ぶ
 「(若者たちが宝物を)私のすぐあとから運んだ」

- (17) cise ni tuypa p tuypa wa opokin rura utar rura
 家 木 切る もの 切る して そのすぐあとから 運ぶ 人たち 運ぶ
 「家の材料の木を伐るものは伐って、そのすぐあとから運ぶものたちは運んだ」

4.1.9. os 「～のあとから」

先行要素の後に述語動詞の動作が起こることを表す。3.2.に示した後置副詞の用法をすべて持っている。イの用例が(18)、アの用例が(19)、ウの用例が(20)、エの用例が(21)である。用例数は30強である。REFSING (1986, p. 124) は位置名詞としている。

- (18) aynu nispa aynu katkemat os paye=an rusuy
 人間 紳士 人間 奥様 のあとから (私が) 行く したい
 「人間の紳士人間の奥様のあとから私は行きたい」
- (19) ikia poro siapka hoski no hoyupu konno
 その 大きい 鹿 先である して 走る と
 os eattukonnoan yuk ne a p uos'uos cascii
 (その) あとから 何とまあ 鹿 である した もの 後から後から 走る
 「その大きい鹿が先に走ると、あとから何とまあ鹿が後から後から走った」
- (20) akor okaypo utar i=os i=nospa
 (私が) 持つ 若い男 たち (私の) あとから (私を) 追う
 「私の仲間の若者たちは私のあとから追ってきた」
- (21) a=kor ona ahun os ahup=an
 (私が) 持つ 父 中に入る あとから (私が) 中に入る
 「私の父が中に入ったあとから私は中に入った」

4.1.10. unno, ounno 「～のあとずっと」

先行要素のあと、述語動詞の動作が継続してあるいは繰り返して行われることを表す。用例はあわせて150ほどである。いずれも格助詞的に働く後置副詞の用法のうちアイエの用法を持っているが、名詞te「ここ、今」に後続した用例はunnoにしか見られない。ここではイ(22)ア(23)の例を示す。REFSING (1986) はこれらの働きを持つunno, ounnoを記述してない。

- (22) tan ukuran unno sinen ne hotke=an ki hawe enta
 この タベ のあとずっと 一人 として (私が) 寝る する 話の様子 か
 「今晚からはずっと一人で私が寝るという話か」
- (23) horaociwe=an hine ounno cise episno irekuttuye a=ki
 (私が) 降りる して (そのこと) のあとずっと 家 ごとに 人の首切り (私が) する
 「私は降りたって、そのあとずっと家ごとに人の首を斬った」

4.1.11. ari 「～を用いて」

以下4.1.15.までは、手段、方法、目的などを表すものである。

ariは、先行要素を手段として、述語動詞の動作が行われることを表す。3.2.に述べた後置副詞の用法のうちイ(24)ア(25)の用法を持つ。REFSING (1986, p. 170) の記述は本稿の記述と矛盾しない。

- (24) konkani pisakku ari ekoypokun atuy an=nise
黄金 柄杓 を用いて 東のほうへ 海 (私が) 汲み上げる
「黄金の柄杓を用いて東のほうの海を私は汲み上げた」

- (25) mun ham an=rise wa ari an=osoro an=pirpa p ne na
草 葉 (私が) むしる して (それ)を用いて (私の) 尻 (私が) 拭く の だ ぞ
「草の葉をむしってそれでお尻を拭いたんですぞ」

4.1.12. kusu, kus 「～のために、～だから」

先行要素を目的または理由として、述語動詞の動作が行われることを表す。

3.2. で述べたうちのエ、つまり接続助詞的な用例の数が多く、拙稿 (1995) では「便宜上」接続助詞の記述に含めて論じておいた。REFSING (1986) および他方言についての従来の記述も接続助詞に相当するものとして分類している。しかし3.2. のア(26)にあたる、連体修飾節のなかにあってその主要部を先行要素としてとる例や、イ(27)の用法も確実に認められるので、本稿の枠組みに従えば後置副詞に分類すべきである。用例はすべてあわせて1200以上存在する。

- (26) mean na, anun neyakka apa neyakka ahup wa apekur yan
寒い ぞ 他人 でも 親戚 でも 入る して 火に当たれ ませ
kus eci=payeka p an=nu na
(その) ために (あなた達が) 旅している もの (私が) 聞く ぞ
「寒いですが、他人でも親戚でも入って火にお当たりなさいませ。
あなた達が旅している理由をお聞きしますぞ」

- (27) wakkauskamuy sanke tope kus aynu opitta kamuy siknu p ne na
水の神 出す 乳 だから 人間 皆 神 生きる もの だ ぞ
「水の神様を出す乳 (沢の水) があるから人間皆も神も生きるのですぞ」

4.1.13. koeumsu 「～があれば」

先行要素が述語動詞の動作のための十分な条件であることを表す。独立的な用例2例しか得られていないが、前後の文脈から後置副詞だと判断した。REFSING (1986) は記述していない。

- (28) wakka se wa ahun wa "hapo koeumsu suke easkay" ari hawki
水 運ぶ して 入る して 母さん (それ)があれば 炊事する できると 話す
「(私の息子が) 水を運んで家に入って『これがあれば母さんは炊事できる』と話した」

4.1.14. *kuskeray*, *kuskeraypo* 「～のおかげで」

先行要素が理由となつて、正の価値のあることとして述語動詞の動作が行われることを表す。接続助詞的な用例(29)が多いが、名詞に後続する用法(30)も確認できる。用例数は50弱である。拙稿(1995:150)ではこれらの語の意味を「～のためだけ、もっぱら～したおかげで」としたが、上のように訂正する。REFSING (1986)には4.2.1.の*keray*についての記述のみがある。

- (29) *kamuy oka kuskeray harukar=an ruwe ne*
 神 いる のおかげで (私達が) 作物を作る 様子 だ
 「神様のいらっしゃるおかげで私達は作物を作るのです」

- (30) *ne nisu kamuy huci kuskeraypo siknu=an ruwe ne*
 その 白 神 お婆さん のおかげで (私が) 生きる 様子 だ
 「その白の老女神のおかげで私は生き延びたのだ」

4.1.15. *renkayne* 「～の思し召しで、～の偶然で」

神の意志、偶然など、話者には予測できない先行要素が原因となつて、述語動詞の動作が行われることを表す。用例は15ほどみられ、ほとんどは名詞句に後続する(31)が接続助詞的とみられる例(32)も存在する。REFSING (1986, p.108)は例文のなかに示して "thanks to" という意味を与えており、独立では記述していない。

- (31) *kamuy renkayne kamuy menoko a=tumam wa hotkeeaskay=an*
 神 の思し召しで 神 女 (私が) 抱く して (私が) 寝ることができる
 「神様の思し召しで私は神のような女性を抱いて寝ることができる」

- (32) *apkas renkayne tuyma kotanのacapo atamo,*
 歩く の偶然で 遠い 村 小父さん たちも
行き会うとき iankarapte onon arki=an ruwe ne
 出会うとき こんにちは どこから (あなたが) 来る 様子 だ
 ってこう *uwepekennu* する
 尋ねる
 「歩くときの偶然で遠い村のおじさんたちも
 出会ったときは『こんにちは、どこからあなたはいらしたのです』
 とこうやって尋ねる」
 (あいさつについてのアイヌ語日本語混じりの説明)

4.1.16. *akkari* 「～を超えて」

この項から4.1.20.までは、比較、比況などを表す後置副詞である。

*akkari*は、ある場所、さらに数、量、美醜などの基準が先行要素となり、先行要素よりも超えたことが述部で述べられていることを示す。用例は30ほど存在する。3.2.に述べたア～エすべての用法が存在するが、ここではア(33)およびエ(34)の用例を示す。REFSING (1986, p.169) の記述は本稿の記述と矛盾しない。

(33) *nis esitciw wa akkari paye ka an=eaykap na*
 雲 地面に刺さる して (そこ) を超えて 行く も (私達が) できない ぞ
 「(前方で) 雲が地面に突き刺さっていて私達はそこを超えて行くことができませんぞ」

(34) *an=i=koonkami akkari wakkauskamuy koyayapapu koonkami yan*
 (受身) (私) に礼拝する を超えて 水の神 謝罪しろ 礼拝しろ ませ
 「私が礼拝されること以上に、水の神様に謝罪しなさい、礼拝しなさい」

4.1.17. *pakno* 「～くらい、～まで」

時間、場所、数、量、能力などについての基準が先行要素となり、先行要素と同程度のことが述部で述べられていることを表す。(35)に示す3.2.のアの用法のほか、イエの用法が確認できる。また程度を表す副詞句に後続して、程度を表していることを強調することもある(36)ので、格助詞的な働きに加えて「副助詞的な後置副詞」としての働きも持っている。REFSING (1986, pp.166, 176) は格助詞のセクションで「向格」として、副助詞のセクションで「時間的・空間的移動の最大限を表す」としている。

(35) *rametok kewtum e=kor nankor na.*
 勇者 心懸け (お前が) 持つ だろう ぞ
pakno e=poro. okkayo e=ne na.
 (それ) くらい (お前が) 大きくなる 男 (お前が) だ ぞ
 「勇者の心懸けをお前はもつのですよ。それだけお前は大きくなり、男なのですよ」

(36) *ney ta pakno e=cis kane e=an*
 どこ に まで (お前が) 泣く しながら (お前が) いた
 「どこまでもお前は泣いていた」

4.1.18. **koraci** 「～と同様に」

先行要素と表面的に類似して述語動詞の動作が行われることを表す。用例数は350弱である。そのうち120は副詞 taa 「こう」に後続し全体で「このように」という意味の副詞句になっている例である。REFSING (1986, p.169, 263) は「比較の格」「比較の名詞化辞」としているが、本稿の資料中には $koraci$ の導く句が名詞的に働いている例はない。3.2. のア～エすべての用法を持つが、ここではアの用例(37)およびイの用例(38)を掲げる。

(37) $aynu\ okkayo\ itak=an\ cik\ koraci\ e=iki\ nankor\ na$
 人間 男 (私が) 話す したら (それ) と同様に (お前が) 行動する だろう ぞ
 「人間の男よ、私が話したらそのようにお前は行動するのだぞ」

(38) $rupne\ utar\ anak\ ni\ ham\ koraci\ ukotutturse$
 年かさだ 人達 は 木 葉 と同様に いっしょに 転がる
 「年寄りたちは木の葉のように皆転がった」

4.1.19. **nenó** 「～と同様に」

先行要素と表面的に類似して述語動詞の動作が行われることを表す。上の $koraci$ との意味の違いはみられないが、独立的な用例(39)と格助詞的な用例(40)のみが存在する。8例ほどの用例を得ている。REFSING (1986) には記述がない。

(39) $itekke\ nenó\ hawki\ yan$
 (禁止) (それ) と同様に 話せ ませ
 「そんなふうに話さないでください」

(40) $aynu\ nenó\ an=nukar$
 人間 と同様に (私が) 見る
 「(その者が) 人間のように見えた」

4.1.20. **nepkon, nepkonka** 「まるで～みたいに」

先行要素と表面的に類似して述語動詞の動作が行われるが、その類似があくまで表面的なものに過ぎないことを表す。4.1.1. の $esoro$ と同じく、統語論的には格助詞の用法しか得られていないが、韻文の行頭に立つことから自立語として本稿で記述する。用例は合わせて4例存在する。REFSING (1986) には記述がない。

- (41) *casi neyakka mun cise nepkon an=nukar*
 館 でも 草 家 まるで～みたいに (私が) みる
 「館でもまるで草の家みたいに見えた」

- (42) *punkar cise/nepkonka an pe*
 蔓 家 まるで～みたいに ある もの
 「まるで蔓の家みたいなもの」

4.1.21. *kawari, kawarine* 「～の代りに」

他の人間などの先行要素の代わりになって、述語動詞の動作が行われることを表す。用例はあわせて5つほどであり、3.2.のイ(43)ウ(44)の例が得られている。REFSING (1986) には記述がない。

- (43) *hapo kawarine otasut ta e=oman wa e=supuyaate*
 母さん の代わりに (地名) に (あなたが) 行く して (あなたが) 炊事の煙を立てる
 「母さんの代わりにオタスッにあなたが行って、炊事の煙を立てて暮らすのです」

- (44) *pokor=an yakun e=kawarine, otasut ta supuyaate p*
 (私達が) 子供を作る たら (お前の) 代わりに (地名) に 炊事の煙を立てる もの
hoski no sik'o ruwe ne
 先 に 生まれる 様子 だ
 「私達が子供を作ったら、お前の代わりにオタスッに炊事の煙を立てて暮らすものが先に生まれるのだ」

4.1.22. *okari* 「～の代りに」

他の人間などである先行要素の代わりになって、述語動詞の動作が行われることを表す。用例は3例得られており、独立的な用法(45)のほか格助詞的な用例も存在する。用例が少ないこともあり、*kawarine*との違いは未詳である。

なおREFSING (1986, p. 124) は《のまわり》という意味の位置名詞を記述しており、本稿の資料中にも3.4.で述べたとおり名詞句に後続して副詞句を作る「～のまわりを」という意味の形式が存在する。しかしそれらには自立性を認めることができなかつたので、助詞についての別稿で記述する。

- (45) *a=korsi utar sekotek konno suy okari pet or ta*
 (私の) 子供 たち 背中を丸めると また (その) 代わりに 川 所に

sap=an wa pet turasi pet esoro sintasuye=an

(私が)降りる して 川 に沿って上へ 川 に沿って下へ (私が) ゆりかごを揺らす

「私の子供たちが背中を丸めているとまたその代わりに河原に

私は降りて上流のほうへ下流のほうへゆりかごを揺らした」

(赤ん坊が悪者にとりつかれ、おぶって子守りをしていた兄や姉は首筋をかきむしられて背中を丸めて苦しんでいる。そこで父親がゆりかごに入れて子守りをする場面の例文である。)

4.1.23. otutanu 「～の次に」

先行要素の次の順番に述語動詞の動作が行われることを表す。格助詞的な用例の確実なものは存在せず、3.2. に述べた格助詞的に働く後置副詞の原型的な用法のうちア(46)ウ(47)の例が存在する。資料中の用例数は6ほどである。REFSING (1986) には記述がない。

(46) iotta kiyanne e=yupihi anak poyyaunpe ari an=ye oro wa

一番 年長である (お前) の兄 は ボイヤウンペ と (受身) 言う そこ から

otutanu an e=yupihi anakne atusaokkay atusarametok

(彼) の次に ある (お前) の兄 は アトゥサオッカイ アトゥサラメトク

pon sik'o hi wano amser ka ta atusa wa an=resu

小さい 生まれる とき から 寝台 上 で 裸だ して (受身) 育てる

「一番年長のお前の兄はボイヤウンペと呼ばれ、それから

その次のお前の兄はアトゥサオッカイ、アトゥサラメトクで、

小さい、生まれたときから寝台の上で裸で育てられたのだ」

(47) nekon an pe kus

どう ある もの のため

i=otutanu an an=aki atusa wa sirutu amser or ta ror ta an=resu

(私の)次に ある (私の)弟 裸だ して 揺れる 寝台 所 で 上座 で(受身)育てる

「どういう理由でか

私の次の弟は、裸で揺れる寝台に乗せて上座で育てられていた」

4.1.24. episno、pisno、pis 「～ごとに」

集合的な先行要素のなかの個々の要素ごとに述語動詞の動作が行われることを表す。episnoは3.2. で述べたうちアイエの用法を持ち、例(48)では最初の用例がイ、次の用例がアの用法にあたる。用例数は30ほどである。pisnoの確実な用例はエの用法1例(49)のみ、pisの確実な用例は格助詞的な2例である。これらの品詞分類はなお課題となる。REFSING (1986, p. 135) は「あちこち、別々に」

という意味の副詞として *episno* を示している。

- (48) *kamuy episno nusaasi=an wa episno tuki a=kor*
 神 ごとに (私は) 祭壇を立てる して (それ) ごとに 杯 (私が) 持つ
 「神ごとに私は祭壇を立てて、それぞれに杯を私は捧げた」

- (49) "a=kor turesi suke eyayhanokka" ari
 (私が) 持つ 妹 炊事 を習う と
a=kor yupo hawki hawki kane suke pisno i=cakoko
 (私が) 持つ 兄 話す ながら 炊事する ごとに (私を) 指導する
 「『妹よ、炊事を習いなさい』と兄は話しながら炊事するたびに私を指導した」

4.1.25. *tura, turano* 「～と一緒に」

先行要素が文中の他の何らかの要素と一緒にあって、述部の内容が実現することを表す。用例は100以上存在する。接続助詞とみられる例もあるが、確実なのは3.2. のア(50)イ(51)およびウの用法である。REFSING (1986, pp. 168—169) の記述は本稿のそれと矛盾しない。

なお接続助詞*no*の前文は主語にあたる要素を必要としない(拙稿、1995:149—150)ため、ここでの*turano*および4.1.26の*mosmano*については2項動詞*tura/mosma*+接続助詞*no*という分析も可能である。

- (50) *menoko anak kamuy okkaypo an=eyaykoresu wa tura an=ama*
 女 は 神 男の子 (私が) 許婚にする して (彼) と一緒に (私が) 置く
 「(子供たちのうち) 女の子は神のような男の子を許婚にして、一緒に住ませた」

- (51) *tan to ounno a=kor turesi tura umurek=an ruwe ne na*
 この 日 からずっと (私が) 持つ 妹 と一緒に (私達が) 夫婦になる 様子 だ ぞ
 「今日からは私の妹と私は夫婦になるのだぞ」(妹は親の養女)

4.1.26. *ekopi* 「～と別れて」

先行要素が文中の他の何らかの要素ともとは一緒だったのに別れて、述部の内容が実現することを表す。用例数は10強であり、3.2. のア(52)イ(53)およびエ(54)の用法が確認できる。REFSING (1986) には記述がない。

- (52) *a=aktonoke kamuy a=aki a=hoppa wa*
 (私の) 弟君 神 (私の) 弟 (私が) 残す て

ekopi hanke repunkur a=kotanu un hosippa ka a=etoranne,
 (彼)と別れて 近い 沖の人 (私の)村 へ 戻る も (私が)嫌だ
 「私の弟君、神なる弟を残して
 彼と別れて、近い沖の人の私の村へ戻るのも嫌だ」

(53) a=kor katkemat ekopi ray=an he ki
 (私が)持つ 奥さん と別れて (私が)死ぬ か する
 「私の奥さんと別れて私は死ぬのか」

(54) yukkorkamuy…cis kane i=koonkami ekopi soyenpa=an
 鹿を司る神 泣く ながら (私に)礼拝する と別れて (私が)外へ出る
 「鹿を司る神が泣きながら私に礼拝するのを置いて私は外へ出た」

4.1.27. mosma, mosmano 「～と別に」

先行要素とは別に、述語動詞の動作が行われることを表す。用例は30弱見られる。独立的用法(55)、格助詞的用法(56)、人称接辞を伴う用法(57)、接続助詞的用法(58)をいずれも持つ。REFSING (1986, pp. 156—157) が示している連体語となる働きは、本稿では同形の動詞mosmaの機能だとした。

(55) a=kor yupo iuta a iuta a
 (私が)持つ 兄さん 搦きものをする (多回) 搦きものをする (多回)
 iuta konno mosma e=teke an=ani wa
 搦きものをする と (彼)と別に (お前の)手 (私が)持つ して
 ape etok ta esisoun eharkisoun yayoterkeeciw=an
 火 上座 で 右座の方へ 左座の方へ (私達が)跳ねまわる
 「私の兄さんが搦きものをしてして
 搦きものをしてしていると、彼と別に私はお前の手を取って
 いろいろの上座で右座の方へ左座の方へ跳ねまわっていた」

(56) kamuy ye p mosmano oka=an yak wen
 神 言う こと と別に (私が)いる たら 悪い
 「神のおっしゃることを聞かずに私がいたらよくない」

(57) tane tane e=mosma sir'an yakun
 今 今 (お前)と別に 事態がある たら

siknu kunpe ka somo e=ne kotom inkar=an
生きる はずのもの も (否定) (お前が) である らしく (私が) 見る
「今やお前は放っておかれたら生きるものでもなくなりそうに見えた」

(58) akor sapo inumpa mosma inawneni a=tuye
(私が) 持つ 姉 搦きものをする と別に イナウの材料の木 (私が) 伐る
「私の姉が搦きものをするいっぽうで私はイナウの材料の木を伐った」

4.2. 副助詞的に働く後置副詞

4.2.1. keray、keraypo 「～ばかり、～だけ」

先行要素と同じ役割を果たしている要素が他にはないことを表す。(59)は3.3.のA、(60)はイの用法である。用例数は20強である。この記述とREFSING (1986, p. 177) の記述とは矛盾しない。

(59) nep ka ku=turiri p ka isam kusu
何 も (私が) 差し出す も も ない ので
keray ku=kor citarpe ne wa
(それ) ばかり (私が) 持つ ござ である して
nispa ku=koyayattasa hawe ne na
旦那さん (私が) 返礼する 様子 である ぞ
「何も私が差し上げるものがないので
こればかり私が持っているござですので
旦那さんに私は返礼するのですぞ」

(60) anani anak sinen a=ne sapo tura keraypo oka=an
私 は 一人 (私が) である 姉さん と一緒に ばかり (私が) 暮らす
「私は一人であり、姉さんとばかり暮らしていた」

4.2.2. opitta 「～皆」

先行要素のすべてが文中での事態の対象になっていることを表す。例文は100以上見られる。(61)が3.3.のAの用法、(62)がイの用法である。

opittaを田村 (1988) は後置副詞とし、また田村 (1996) は副詞としている。本稿の扱った方言では、名詞句+opittaはすべて名詞句のままであり、連用語としなければならない例はみられない。いっぽうREFSING (1986, p. 119) はこの語を「量の名詞」としている。確かに得られているすべての例で先行要素が名詞句なので、nimar《半分》serke《部分》などと同じくこの語を量の名詞だ

と考えることも可能である。しかしその場合には、*opitta*に2人称複数の人称接辞が接頭した*eci=opitta*がなお人称接辞*eci*とともに用いられている(63)ことを、別なかたちで一たとえば*eciopitta*という人称代名詞を立てるなどして一説明しなければならない。

- (61) *opitta kewtumu pirka katkemat nispa utar*
 皆 ~の心がけ(所属形) よい 奥さん 旦那さん たち
 「皆心がけのよい奥さん旦那さんたち」

(*katkemat nispa utar opitta kewtumu pirka*という文から作られた連体修飾表現)

- (62) *kusur' unrup a=kor ona kor pe opitta se wa isam ruwe ne*
 釧路の住人(私が)持つ 父 持つ もの 皆 運ぶ して しまう 様子 だ
 「釧路のやつらは私の父の持ち物皆を運んでしまったのだ」

- (63) *payeka=an somo ki akanak eci=opitta wen kamuy or wa*
 (私が) 通りかかる (否定) する したら (あなた達) 皆 悪い 熊 所 から

an=eci=e wa isam a ruwe ene an hi an
 (受身)(あなた達を)食べる して しまう た 様子 こう ある こと ある
 「私が通りかからなかったらあなた達皆、悪い熊に
 食べられてしまっていたのか」

参考文献

- REFSING, Kirsten (1986) : *The Ainu Language*, Aarhus University Press.
- 浅井 亨 (1969) : 「アイヌ語の文法 —アイヌ語石狩方言文法の概略—」、アイヌ文化保存対策協議会(編)『アイヌ民族誌』、第一法規出版、pp. 771—800.
- 奥田 統己 (1995) : 「アイヌ語静内方言の接続助詞」、『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1 : 139—159.
- (1997) : 「アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞」、『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3 : 195—214.
- 金田一京助 (1931) : 「アイヌユーカラ語法摘要」、『アイヌ叙事詩ユーカラの研究 第一冊』、東洋文庫
- 静内町教育委員会(編) (1991) : 『静内地方の伝承(I)—織田ステノの口承文芸(1)—』。
- (1992) : 『静内地方の伝承(II)—織田ステノの口承文芸(2)—』。
- (1993) : 『静内地方の伝承(III)—織田ステノの口承文芸(3)—』。
- (1994) : 『静内地方の伝承(IV)—織田ステノの口承文芸(4)—』。
- (1995) : 『静内地方の伝承(V)—織田ステノの口承文芸(5)—』。
- 田村(福田)すず子 (1960) : 「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その1—」、『民族学研究』24/4 : 67—78.
- 田村すず子 (1964) : 「アイヌ語沙流方言の名詞(その1)」、『早稲田大学語学教育研究所紀要』3 : 33—59.
- (1982) : 「日本語・アイヌ語・カナダエスキモー語・バスク語における位置関係の表し方」、『木村宗男先生記念論文集』pp. 69—90、早稲田大学語学教育研究所.
- (1988) : 「アイヌ語」(項目)、『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 上』pp. 6—94、三省堂.
- (1996) : 『アイヌ語沙流方言辞典』、草風館.
- 知里真志保 (1942) : 『アイヌ語法研究 —樺太方言を中心として—』、『樺太庁博物館報告』4/4(参照ページ数は『知里真志保著作集 3』所収のものによる).
- (1953) : 「アイヌ語の助詞」、金田一博士古稀記念論文集刊行会(編)『金田一京助博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂、pp. 913—932.

Postpositional Adverbs in the Shizunai Dialect of Ainu

OKUDA Osami

This is another attempt to describe the Shizunai dialect of Ainu, following on from the author's previous articles "Conjunctionalizers in the Shizunai dialect of Ainu" (1995) and "Adverbial Particles and Sentence Final Particles in the Shizunai Dialect of Ainu" (1997).

While REFSING (1986) has already presented a comprehensive description of the same dialect, the present author feels that there is room to modify and supplement this work according to the results of his own research. The author also surveys the major descriptions of these forms that have been previously published and contrasts the postpositional adverbs of the Shizunai dialect with those of other dialects.

The present research is largely based on an analysis of folklore texts narrated by Ms. Orita, an Ainu lady who lived in Shizunai district from 1901 to 1993. Amounting to 110,000 tokens, these were recorded on tapes by the Shizunai Board of Education and transcribed and translated into Japanese by the present author. The greater part of these texts have already been published by the Board (1991-1995).

According to the author's definition, postpositional adverbs are those forms which function either as adverbs independently or as postpositions preceded by noun phrases, adverbial phrases, or verb phrases.

According to the present research, most of these forms are case-related and function not only as adverbs but also as case postpositions or as conjunctionalizers. However, the author also points out that a few of the postpositional adverbs behave differently. These forms only work as adverbs or as adverbial particles and do not modify the syntactic role of their antecedents.

Key Words: Ainu language, postpositional adverbs, case marking, case particles, adverbial particles